

## 倭政権の国境域防衛機構——軍事的施策と宗教的施策——

小嶋 篤

本研究では、倭政権の軍事的施策と宗教的施策を検討し、国境域防衛機構の全体像描写を試みた。軍事的施策の一つとして施行された古代山城の築城は、古墳時代後期より整備されてきた戦時侵攻体制（軍事動員・物資備蓄）上に存在しており、交通路や拠点的ミヤケの分布とも一定の相関関係をもつ。外敵襲来時の「戦場」となる筑紫洲北部では、『日本書紀』では古代山城築城記事に先んじて、防人・烽配備とともに水城築造が記載されるため、筑紫洲を縦走する南北路の閉塞が重要視されていることが分かる。次いで築城記事がある大野城と、その対面にある小水城群・牛頸丘陵は、水城を挟んで鶴翼状配置を採り、水城前面での外敵迎撃が基本戦略であつたと把握できる。この主要迎撃地点で臨戦態勢を採つていたのが筑紫大宰である。筑紫大宰が動員する公的軍隊は、任地の筑紫国造軍が主力であり、同国造軍は鞠智城とも接続する南北路を利用して外征軍動員を重ねてきた実績がある。つまり、水城前面での外敵迎撃は戦術的優位だけでなく、軍事動員・兵站確保という戦略的優位も確保していたと評価できる。

一方で、外敵襲来が警戒される玄界灘航路の要衝・宗像地域は、古代山城分布の空白地である。宗像地域は古墳時代（四世紀）より倭政権が信仰してきた宗像神の坐す地であり、同地には充神民が居住してきた。古代山城築城期と重なる飛鳥時代後半（七世紀後半）には神郡が宗像神に奉じられ、倭政権の宗教的施策として重要視されていたことが分かる。神郡郡司・宗像神社神主を同族のみで独占する宗像君（宗形朝臣氏）と、その服属集団である宗像部は玄界灘航路沿いの港湾に分布し、古墳時代中期以後、筑紫君とならぶ大規模動員力を古代山城築城期にも保持していた。つまり、宗像神が坐す神郡は、軍事と宗教の両面で守護された土地であったと評価できる。

総括すると、「戦場」となる筑紫洲での古代山城配置には、地質環境や交通路といった即物的な軍事要因だけでなく、①各国造軍を率いる氏族の歴史的実績や、②倭政権の国家的宗教体系も反映していると結論できる。



# 倭政権の国境域防衛機構——軍事的施策と宗教的施策——

小嶋 篤

## はじめに

本研究では、古代山城群が築城された飛鳥時代における倭政権の防衛機構について、軍事的施策と宗教的施策の両面から追究する。軍事的施策を検証できる代表的考古資料が「古代山城」であり、鞠智城の調査研究をはじめとした研究蓄積がある。一方で、防衛戦略における宗教的施策についての研究、とくに四天王信仰と古代山城が国策として結合した宝亀五年（七七四年）以前については研究蓄積が進んでいない。しかし、古代山城の築城・整備期（天武朝以降）に編纂が進められた『古事記』・『日本書紀』を読むと、戦争時に神仏への祈りを捧げる場面が散見され、軍事目的の達成が神仏の加護下でなされるという認識がうかがえる（註1）。加えて、統治者の施策・統治理念としても、神祇・仏法守護を重要視しているのは明らかである（註2）。つまり、唐・新羅軍の来襲に備えた飛鳥時代（六六三年以降）の防衛機構においても、軍事的施策に加えて、宗教的施策を把握しなければ全体像は見通せないと考える。

本研究では上記研究視点に基づき、飛鳥時代における倭政権の軍事的施策と宗教的施策を個別に検討した後、両者を有機的に統合することことで、国境域における防衛機構の描写を試みる。なお、論理構成上、現代の合理的思考により「軍事」と「宗教」に二分する形で検討を進めるが、「軍事」と「宗教」の境界自体が曖昧な社会を対象としていることを前提条件として掲げておきたい。

（二）国造軍の筑紫駐屯  
旧百濟国からの撤退 白村江の戦い（天智天皇二年（六六三年）八月十七～二十八日）を経て、確認できる軍事行動は旧百濟国からの倭国軍の撤退である。『日本書紀』によると、同年九月二十四日に弓礼城から百濟遺民とともに船出している。組織的撤退がどの程度遂行されたかは不確かだが、残存部隊の主力は船団を組んで渡海したことが分かる。倭政権としての最初の軍事施策は、筑紫洲北部でなされた部隊の再編成である。本編成は帰郷に向けた態勢整備とともに、唐・新羅軍の動静把握がなされるまでの防衛を兼ねたと考えられる。

国造軍の駐屯と古代山城 百濟救援戦争勃発から戦後対応にいたる期間は、筑紫に日本各地の国造軍が駐屯する。つまり、同期間は新規徵発を経ずに、多くの人夫を確保することが可能であり、国境域の主要な古代山城（金田城・水城等）の築城着手時期とし

「特別研究」を皮切りに、①施設、②軍隊、③兵器、④戦術、⑤戦略といった視点から多角的検討を重ねてきた（小嶋二〇一六b.c.二〇二一a・二〇二四a等）。以下ではその成果も組み込みながら、倭政権の軍事的施策を整理する。

## 一・倭政権の軍事的施策

て有力視できる（小嶋二〇二四a）。古代山城の築城記事は、すべて白村江の戦い以後の掲載であるが、同記事が築城開始・築城完了のどちらを指すのかは未決着である。考古資料に基づく古代山城

築城時期の把握では、①鞠智城跡出土土器の総量分析、②大野城

跡出土土器の総量分析、③大野城跡出土木柱の年輪年代測定、④水城跡木樋埋設土坑内出土土器が有力な根拠であるが、いずれも白村江の戦いの前後を定めるには至らない（近江二〇一八、木村二〇一五・二〇一六）。これらのうち、唯一の新規築城型古代山城である大野城において、七世紀第3四半期（小田編年V期）の土器が最古相となる点をふまえれば、国家が重要視した古代山城が百濟救援戦争と密接に関係することまでは認めてよい（図2）（小嶋二〇二四a）。

## （二）玄界灘航路と防人・烽

防人・烽の役割 倭国軍撤退後の天智天皇三年（六六四年）になされた軍事的施策が、対馬・壱岐・筑紫国等における防人・烽の配備である。対馬・壱岐・筑紫国を並記することから、対馬海峡と壱岐海峡を内包する玄界灘航路沿いを最も警戒していることは明らかである。また、防人と烽の並記から、本施策は外敵襲来の情報収集に重点が置かれていることも確実視できる。天智天皇十年の唐使節來朝時に防人による弓射を危惧している点もふまえると、部隊長判断での対処的防衛も担つていたと見てよい。

防人の兵数と管掌 防人の総兵数は、奈良時代の『駿河国正税帳』『周防国正税帳』から約2000人と把握でき、同人数を対馬・壱岐・筑紫国等に分散配備した。また、大宰府官司に防人司が配されてい

ることから逆算すると、飛鳥時代の防人は筑紫大宰が管掌していたと見るのが妥当である。

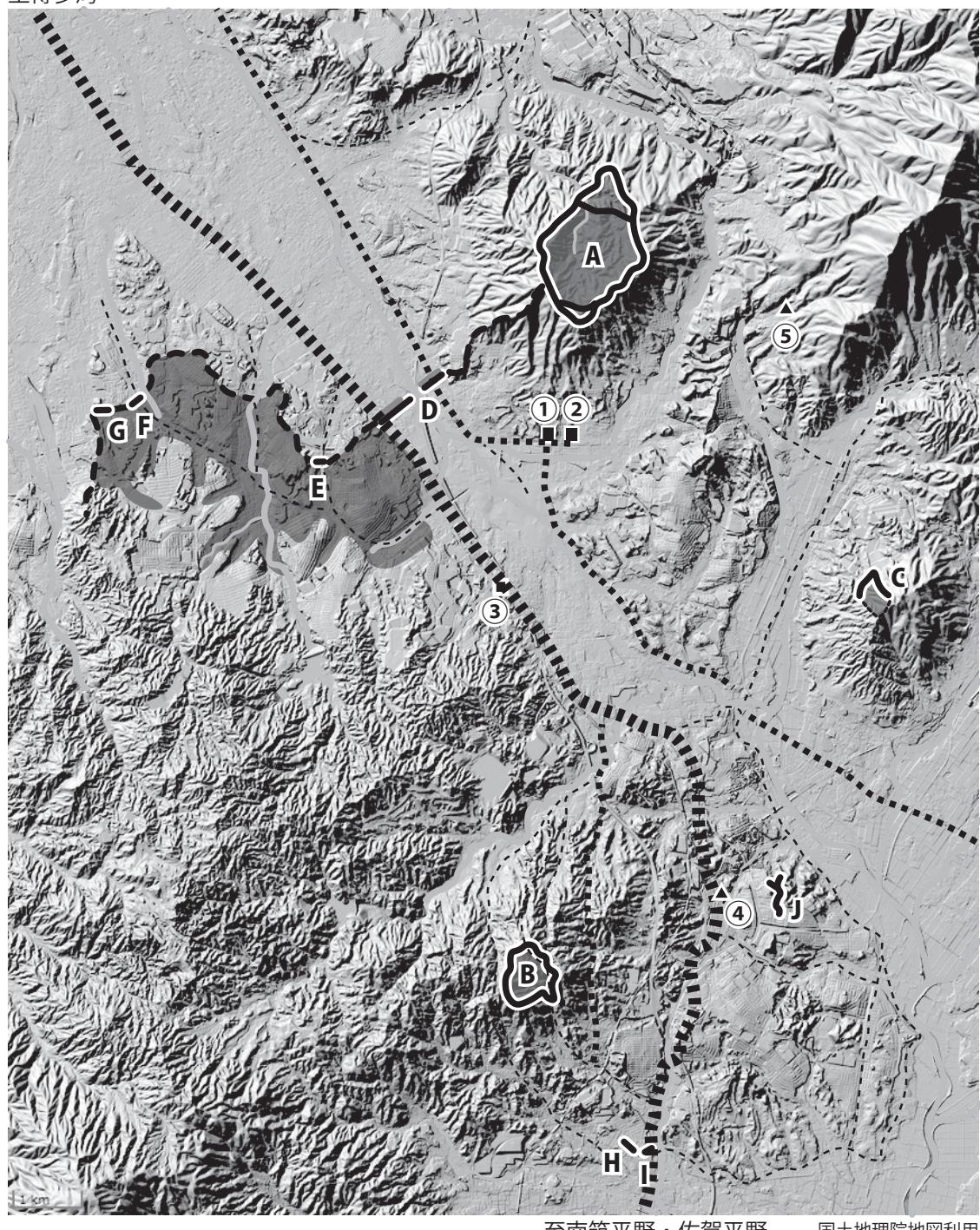
## （三）筑紫縦貫道と古代山城

水城と戦場 天智天皇三年（六六四年）に防人・烽配備となられたのが、水城築造である。水城が閉塞した二日市地峡帯は、筑紫洲内陸部の人馬・物資を「東は宮、西は朝鮮半島」へ運ぶ南北路の収束地である。本南北路の幹線路を「筑紫縦貫道」と呼称しているが、同道が古墳時代後期（六世紀）より倭政権の外征軍動員を支えてきた（小嶋二〇二一a・二〇二四d）。つまり、倭政権の国境域防衛において「水城前面における迎撃」は防衛戦略の基本軸として優先する軍事施策であつたと見てよい（図1）。

水城の右翼 水城を有機的に機能させる施設が、天智天皇四年（六六五年）に築城記載がある大野城である。大野城最高所の毘沙門天地区（四王寺山山頂域）は、水城土壘から延伸する尾根線と接続し、かつ水城前面を睥睨する立地となる。また、同地は大野城跡でも築城・整備期の出土土器量が最も多いことから、大野城守衛のみならず国境域防衛で重要視されていたことを裏付ける（吉田他二〇二二）。

水城の左翼 大野城と水城前面を挟んで向かい合うのが、牛頸丘陵・牛頸窯跡群である。同地の谷には小水城群が確認されていることから、牛頸窯跡群が大宰府外郭線内に存在することが注目された（石木二〇一九、上田二〇二四、吉田二〇二四等）。同地が防衛施設に取り込まれた要因については、牛頸丘陵における遺跡形成過程をふまえる必要がある。古墳時代後期より操業が本格化する牛

至博多湾



至南筑平野・佐賀平野

国土地理院地図利用

【古代山城】A：大野城 B：基肄城 C：阿志岐古代山城

【土塁】D：水城 E：上大利小水城 F：大土居小水城 G：天神山小水城 H：とうれぎ土塁

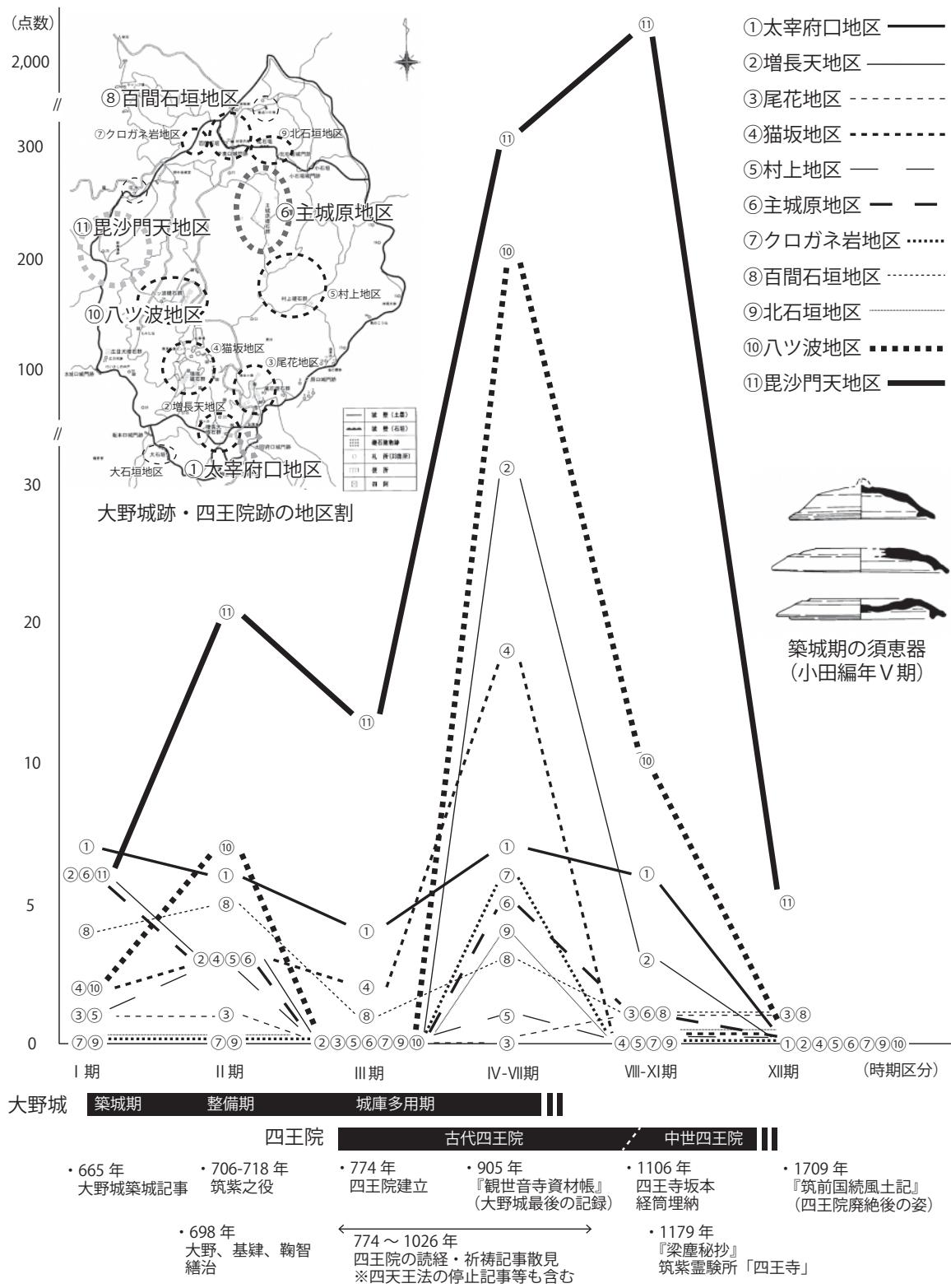
I：閑屋土塁 J：前畠土塁

【官衙】①大宰府政庁 I 期官衙

【古代寺院】②觀世音寺 (746 年完成) ③: 塔原廢寺

【神社】④筑紫神社 ⑤竈門神社

第 1 図 筑紫大宰管轄下の城塞郡と南北路



第2図 大野城跡・四王院跡出土土器の数的推移（九州歴史資料館所蔵品のみ）

頸窓跡群は、平野側から山地側に向けて山林伐採（燃料林利用）を進め、飛鳥時代には丘陵部全域で低草木化が進行していたと把握できる。伐採地のうち居住好地には居住域・墓域が形成され、谷水田も営まれていただろう。また、生産された須恵器を搬出する道路も整備されていたことも確実視できる。つまり、遺跡形成過程をふまえると、水城の左翼となる牛頸丘陵周辺は、平野部を睥睨でき、かつ居住地・交通網が整備された環境にあることから、陣地構築に適した場所であつたと評価できる。裏を返せば、敵軍が同地を占拠した場合、水城は機能不全に陥り、かつ御笠川を挟んで大野城と向き合う攻城の拠点的陣地としても機能し得る。以上の理由から、歪な形状の牛頸丘陵も小水城群に取り込まれたと考える。

**鶴翼状陣地と戦線維持** 防衛戦略の基本軸と把握できる「水城前面における迎撃」は、左翼・大野城、中央・水城、右翼・小水城群という鶴翼状陣地で構成されていたと結論できる。本陣地構成は兵制改革途上にある国造軍の部隊構成（前軍・中軍・後軍）でも運用可能である。加えて、本迎撃陣地は鶴翼という戦術的優位だけではなく、戦線維持という戦略的優位を確保している点が重要である。水城が閉塞する筑紫縦貫道は、筑紫洲内陸部の国造軍動員路であり、軍隊・物資の補充体制が累代的に整えられてきた。この戦時侵攻体制の下、敢行されたのが百濟救援戦争である。

「水城前面における迎撃」を軍事的に実現させるには、相当数の軍事動員を見込む必要があるが、本兵員を常備軍として駐屯していたとは考え難く、非常時（防人等による外敵確認を経た、筑紫大宰の軍事動員発令時）にあわせて国造軍を派兵・集結させる戦略であつたと考える方が現実的である。情報伝達・行軍速度・物資運搬能力

に限界がある近世以前において、城塞群の戦線を維持するには、筑紫国造をはじめとする筑紫洲内部の諸豪族を「軍隊」として機能させることが必須であり、本構造を物理的に支えたものが筑紫洲を貫く南北路であった。

**筑紫大宰の臨戦態勢** 主要迎撃地点である水城前面、その後背に造営されたのが「筑紫大宰の府」である大宰府政厅Ⅰ期官衙である。大宰府政厅Ⅱ・Ⅲ期官衙の地下にあるため、全容は不明だが、周辺官衙跡出土遺物から官衙造営を主目的に建設された律令的複合冶金工房群の操業時期（小田編年VI期）は水城・大野城築城（小田編年V期）に後続する（小嶋二〇一四・二〇一六a）。地峡帯平地部における都市造営着手時期も同様である（井上二〇二四）。天智朝における筑紫大宰の所在地（平時）は「大野城城内」と「水城後背の四王寺山南西麓」の二説が有力であるが、いずれも確証に欠く。どちらにせよ、筑紫の軍事動員機構を統轄する筑紫大宰が、主要迎撃地点に常時臨戦する態勢、戦場・陣地を目視できる態勢を採っていたことは認められる（図1）。同時代の大乱である壬申の乱（六七二年）では、戦局を左右した不破関封鎖の後、高市皇子は父の大海上皇子に向けて、主戦場により近い不破で軍事指揮を執るように上申している（註3）。指揮系統を円滑に機能させるための陣地配置において、戦場との距離が重要視されていることが分かる。

**筑紫大宰の城塞群** 水城は後に大宰府の境界（大宰府外郭線）となるため、最終防衛線のように認識されがちだが、古代山城築城期において水城陥落は必ずしも戦局を決定づけない。水城を突破した先にあるのは、大野城・基肄城に挟まれた地狭部であり、同地に敵軍が進軍・駐屯することは戦術的危険性を抱え込むことになる（註4）。

4)。また、地峡部をさらに進んだ先にあるのは、開析谷が入り乱れる三国丘陵であり、「鞍轡尽しの坂」といった隘路を基肄城より見下ろされた状態で進軍せねばならず、倭国軍も同地を迎撃地点として構想していたことが前畠土塁・関屋土塁・とうれぎ土塁といった施設から裏付けられる。

筑後川を渡った先にあるのが、筑後国府先行官衙・高良山古代山城・上津土塁である。筑後国府先行官衙・上津土塁は筑紫地震の痕跡が確認されており、六七九年以前に造営される（松村一九九四）。これらの施設は、筑紫国分割以前において筑紫大宰の管轄下にあつたと判断できる（小嶋二〇一四・二〇一六a）。

#### （四）小結—戦場としての筑紫—

倭政権の国境域防衛において、優先的に実施した施策は対馬・壹岐・筑紫国への警戒、並びに筑紫洲を縦貫する南北路の閉塞である。水城に次いで築城記事がある大野城・基肄城も南北路沿いに立地する。築城記事を欠くが、大野城・基肄城とともに重要視された鞠智城も、古墳時代後期より外征軍動員に用いられてきた南北路と有機的関係をもち、同時期に築城されたことが出土遺物から判明している（木村二〇一六、矢野二〇一八・二〇一九）。

後に「大宰府外郭線」を構成する城塞群は、日本列島で唯一戦術単位での連携が可能な古代山城群であり、「辺賊の難」に備えた要地（主要迎撃地点）として「筑紫大宰」が常駐した。他の古代山城は戦略単位での連携は認められるが、城内を基点とした部隊展開距離を鑑みると、戦術単位での連携は難しい。分散する古代山城は、外敵による現地での兵站確保（評倉保管物の収奪等）を阻害すると

ともに、各国造軍の「遊兵化」（戦場離脱・逃散）の抑止を兼ねた軍事動員基点と考える。

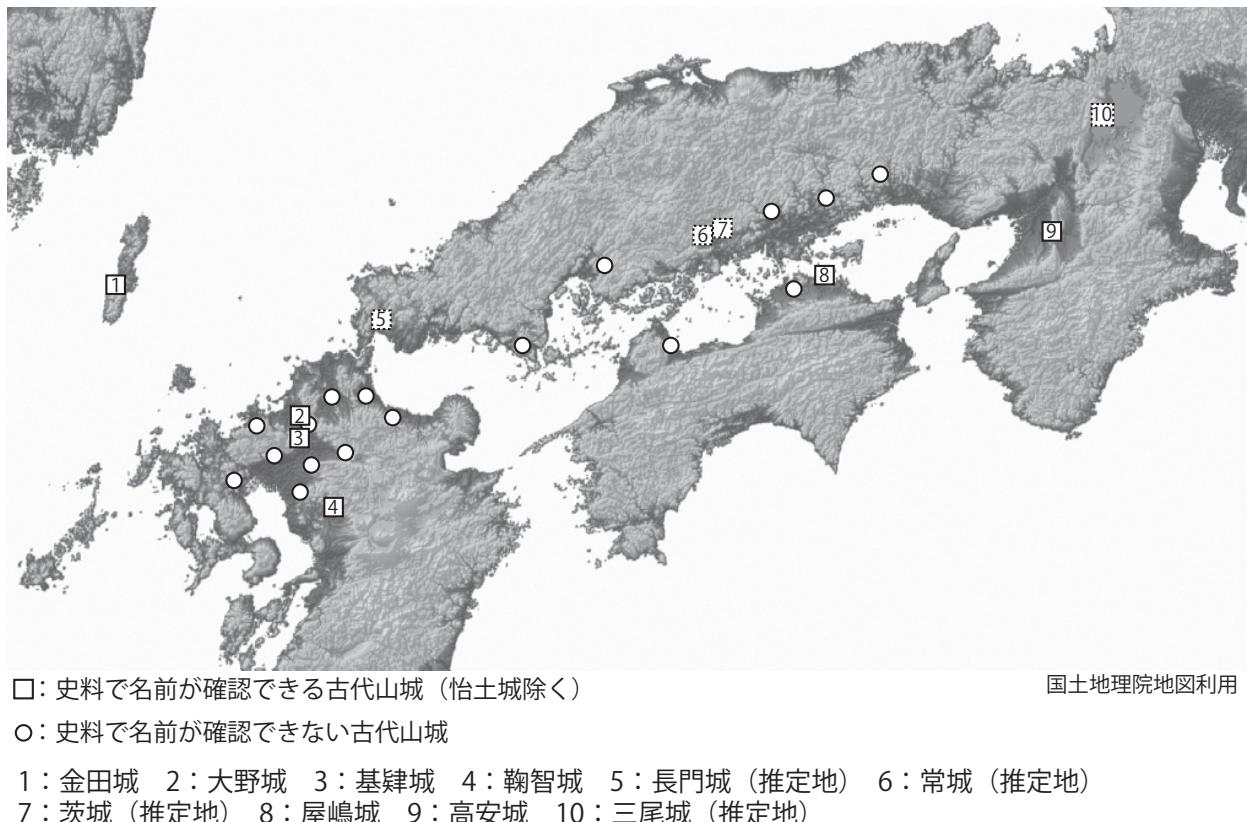
以上をふまえると、倭政権の軍事的施策において、対馬・壹岐・筑紫国への国境域防衛は、同地が「戦場」となることを念頭に立案していると結論できる。

## 二、倭政権の宗教的施策

古代山城は、①「戦場」となる筑紫に重点的に配されていること、②玄界灘航路・瀬戸内海航路や交通路と密接な関係にあることは、学界の統一見解と見なしてよい（齋藤・向井二〇一六、向井二〇一七）（図3）。この統一見解に照らし合わせたとき、倭政権が国家祭祀を執り行い、神郡を設定した宗像地域は、筑紫洲の北端に位置し、玄界灘航路の要衝であるにも関わらず、古代山城が未確認であることには、現代の合理的思考下での矛盾が存在する。本矛盾に着目しつつ、国境域における倭政権の宗教的施策を検討する。

### （一）玄界灘航路と式内社

国家領域観の偏り 「筑紫」の名は広義では筑紫洲全体を、狭義には筑前・筑後を合わせた地域を対象に用いられた。「筑紫」の定義の揺らぎは、『古事記』・『日本書紀』にはすでに認められ、少なくとも記紀編纂が開始された天武・持統朝には存在した。加えて、筑紫国に配された筑紫大宰府の存在が象徴的に示すように、「筑紫洲」という島名は、土地認識として九州北部に大きく偏った名前と言つてよい。上記現象は、律令国家形成期における倭政権の国家領



第3図 古代山城の分布

域觀が強く反映されている。

律令国家形成と対外的脅威 偏った国家領域觀形成の起点には、宮がある畿内と朝鮮半島南部を接続する「瀬戸内海航路・玄界灘航路」がある。同航路を幹線路として百濟救援戦争へといたる国造軍の派兵、次いで百濟救援戦争以後の古代山城群築城がなされた。唐・新羅という対外的脅威の存在は、産声をあげはじめていた日本列島の律令国家に強く刻まれたと評することができる。

式内社の偏在 以上のような九州北部偏重の国家領域觀・対外的脅威の認識は、筑紫洲における宗教空間の重要な構成要素となつている（小嶋二〇二四c）。本構造を端的に示すのが、『延喜式』（延長五年（九二七年）奏進、康保四年（九六七年）施行）記載の「神名式記載社（式内社）」の偏在である。西海道百七座のうち七割以上が対馬（二十九座）、壱岐（二十四座）、筑前・筑後（二十三座）に坐しており、巨視的に見れば、国境防備を目的とした宗教体系の存在がうかがわれる（森二〇二二）。『延喜式』が施行された一〇世紀は、新羅・唐（九〇七年亡国）との公的交流が絶えて久しく、対馬・壱岐・筑紫国での式内社の偏在は一〇世紀以前に累積した宗教体系、とくに玄界灘航路が重要視された社会を反映していると考えられる。これら式内社のうち、古代山城の築城と同時代に確たる神社組織を整備したのが、宗像神を奉斎する宗像神社（明神大社）である（註5）。同社に神郡を奉じたことをふまえれば、倭政権の宗教施策でも重要視されていたことは明らかである。

## （二）倭政権と宗像神

古代山城築城期に神郡が奉じられた宗像神と倭政権の関係について

て、文献史料と考古資料を基に整理する。

**胸形大神と渡来系技術** 『日本書紀』における宗像神の奉斎記事は、神代を除くと応神天皇四十一年二月条の胸形大神への縫工女・兄媛献上記事が最も古い（註6）。同記事では吳国に派遣された使節が筑紫国に帰国した際に、「胸形大神の求め」に応じて四人の縫工女のうち一人を献上したとされる。

**充神者の帰属問題** より倭政権との関係を物語る記事では、履中天皇五年三月条の「筑紫に居す三神」の宮中顯現が注目できる（註7）。宮中に現れた三神は「どうして我が民を奪つたのか。汝に漸みせん」と宣したが、「祈而不祠」なかつたことにより、后妃である黒姫の死去という事態が生じた。後に「我が民」とは三神に献納されていた充神者を指すことが明らかとなり、筑紫に赴いた車持君が独断で充神者を管轄下（車持部）に置いたことが発端であつたことが判明した。天皇は改めて充神者を三神に献納して事態の收拾を図つた。

#### 倭政権からの祝の派遣

雄略天皇九年二月条には、胸方神を祀るために凡河内直香賜と采女を派遣したことが記されている。奉斎時に香賜が采女を犯したため、天皇は香賜を誅した。本記事は胸方神奉斎時の不祥事により記録されたものであるが、倭政権による祝（神主・司祭者）の派遣を明記した唯一の史料として重要である（註8）。

**大海人皇子と尼子娘の婚姻** 天武天皇二年（六七三年）二月条に「胸形君徳善が女尼子娘を納して、高市皇子命を生しませり」と記されており、壬申の乱で活躍した高市皇子の母方氏族が宗像君であることが分かる（註9）。高市皇子は持統天皇一〇年七月に死去するが、年齢未記載なため正確な生年は不明である。壬申の乱時

の活躍をふまえると、百濟救援戦争以前の生年と見込まれる。高市皇子は大和国城上郡に宗像神を勧請したとも伝えられる（龜井二〇一）。また、高市皇子の嫡子・長屋王の邸宅跡で出土した荷札木簡「宗形郡大□□〔領鮒カ〕鮒」は、大海人皇子より続く宗像君との累代的な繋がりを示す物証である。

#### 倭政権と沖ノ島祭祀遺跡

以上の文字史料とあわせて注目されるのが、世界文化遺産の構成資産である沖ノ島祭祀遺跡である。同遺跡は「祭具や奉納品となる出土資料の種類」と「祭具・奉納品を納めた場所と関係する出土位置」の組み合わせから、岩上祭祀遺跡、岩陰祭祀遺跡、半岩陰・半露天祭祀遺跡、露天祭祀遺跡の四種類に整理されている。祭祀遺跡形成の起点となる岩上祭祀遺跡は、最古相（一八号遺跡）では「大王直祭型」、最新相（一二号遺跡）では「委託祭祀型」への変遷が示されている（小田二〇一九）。「大王直祭型」とは、『日本書紀』雄略天皇九年二月条で確認できる、大王が祝を派遣して実施した宗像神の奉斎である。「委託祭祀型」は倭政権主体の祭祀を宗像君に委託して実施した宗像神の奉斎である。宗像神の信仰には、①玄界灘沿岸域で育まれてきた在地的信仰、②宗像君等豪族の氏族的信仰、③倭政権主体の国家的信仰という三つの階層が重なつてゐる。

#### 滑石製祭具の導入

大王直祭型から委託祭祀型への変遷を傍証するが、宗像地域（宗像第一領域）における滑石製祭具の導入状況であり、筑紫洲では非在地の祭具であつた滑石製祭具を積極的に宗像君が受容したことを示す（清喜二〇一八、小嶋二〇二二-b）。宗像君の本拠地である勝浦潟沿岸の在自小田遺跡でも、大型の独立棟持柱付掘立柱建物近傍で検出された祭具集積において、土器・鉄器

類とともに滑石製白玉・有孔円板・紡錘車が出土しており、首長権との結合を実証できる（重藤二〇一二）。また、導入期の滑石製品生産工房には、釣川流域の富地原神屋崎遺跡（TK二一六〇MT一五型式期）があり、原石から白玉等への製品に加工する諸工程の残滓が認められる。

### （三）宗像君と神郡

宗像君一族史 宗像神の奉斎において、倭政権主導の祝派遣（大王直祭型）が重要な画期であることを確認した。祭具の導入状況から、古墳時代中期後半には宗像君を倭政権の祝とする委託祭祀型へと国家祭祀は変遷すると把握できる。また、神郡の設定がなされた孝徳朝（持統朝）において、王家と宗像君が血縁的結合を有していた。次に祝を輩出した宗像君一族の歴史を軸に、宗像神社の形成過程を探る。

勝浦潟の開発と渡来人集団の組織化 古墳時代中期～後期の大型前方後円墳が築かれた津屋崎古墳群は宗像地域最大の墓域であり、同地に君臨した宗像君が被葬者候補の筆頭となる。津屋崎古墳群が見下ろす勝浦潟（入海）周辺は、宗像君の主要居住域の一つと評価できる。

勝浦潟周辺は古墳時代前期以前の居住も認められるが、面的開発（遺跡数増加）の画期は、古墳時代中期に求められる（平尾・上田・小嶋二〇二四）（表1）。本見解は古墳時代前期の集落と古墳時代中期以降の集落に重複関係がほぼ認められることから、資料的空白は小さい。したがって、新興開発地に同時代の墓域と居住域が営まることから、両者は有機的関係にあると判断できる。勝浦潟の開

発を遺跡動態から探ると、西郷川流域に近い勝浦潟南側の在自・須多田地区から居住域を拡大し、五世紀中頃には勝浦潟北端にも居住域が広がる。以後、古墳時代後期を通じて宗像地域最大の港湾として機能する。本開発の背後には馬韓系渡来人の存在が色濃く見られ、鳥足文土器や陶質土器、排水溝・オンドル付竪穴建物等の複合的な痕跡が認められる（龜田二〇一三、重藤二〇一二）。これらは玄界灘航路の物流を反映するだけでなく、生活様式・石室構造の変化も伴うことから、宗像君による渡来人集団の組織化が存在する。

津屋崎古墳群の多系列構造 古墳時代前期後半～中期前半は、釣川流域・玄界灘沿岸域で中小規模古墳が増加する。当該期は前方後円墳が未確認であり、永浦四号墳（円20m）・宮司井出ノ上古墳（円26m）・奴山正園古墳（円32m）等の中型円墳が各集団の最上位階層墓となる。このような状況を一変させるのが、古墳時代中期後半以降における勝浦潟周辺墓域・津屋崎古墳群での大型前方後円墳の連続的・多系列的築造である。その初現として広く評価されているのが、勝浦峯ノ烟古墳・井ノ浦古墳である（重藤二〇一一・二〇一八）。また、新原・奴山古墳群南方の尾根先端に築かれた生家大塚古墳は、墳丘表飾の比較から、勝浦峯ノ烟古墳より古相の大型前方後円墳に位置づけられる（小嶋二〇二二一c）。津屋崎古墳群における大型墳築造の集中は、宗像地域における宗像君の台頭と連動する事象と評価してよい。津屋崎古墳群は多系列の首長墓群で構成されており、首長居館の分散が予測される。大型竪穴建物・側柱建物が複数地点（異なる谷筋）に分散する状況は墓域の様相とも整合性が高い。

津屋崎古墳群内で墓域と居住域の関係をより示すのが、奴山伏原



表1 宗像地域の遺跡動態

時期区分		先1期古	先1期新	1期古	1期新	2期	3期	4期	5期
		久住ⅠA	久住ⅠB	久住ⅡA	久住ⅡB	久住ⅡC	久住ⅢA	久住ⅢA新 重藤ⅢA	重藤ⅢB
地域・遺跡名	辺津宮周辺								
								●上高宮(20)	
				3c中～後	3c末	4c初頭	4c中	4c後半	4末5初
		辺津宮周辺墓域							
		神湊・浜宮貝塚							
		釣川東岸域墓域					◎河東山崎(30)	◎稻元久保14号	
		武丸初瀬 池浦高田						●久戸(7～17)	
		三郎丸・須恵窯群							
釣川東岸	釣川東岸	稻元窯群							
		山田窯群							
				◎徳重本村2(19)	●大井平野(23)	◎田久瓜ヶ坂1(30)	◎東郷高塚(61)		
						◎田久貴船前1・2			
		釣川西岸域墓域				●田久瓜ヶ坂(1～20)	●大井平野(23)		
		富地原周辺集落				●久原(23)			
		富地原・高田・小伏				●朝町妙見(16)	●富地原(10)	●徳重仏祖(18)	
		徳重本村							
		王丸・野坂・光岡							
		久原							
釣川西岸	釣川西岸	東郷・田熊							
		大井							
		朝町・浦谷窯群							
		勝浦周辺墓域							
		勝浦							
		練原							
		新原周辺墓域						●奴山正園(32)	
		奴山・生家							
須多田周辺	須多田周辺	須多田周辺墓域							
		須多田							
		在自							
		宮司周辺墓域						●宮司井手ノ上(26)	
		手光						●手光古墳群(20)	
		宮司						●福間割畠(10)	
		井戸・蓮烏・香雲							
花鶴川周辺	花鶴川周辺	花鶴川周辺墓域						●浜山千鳥14(19)	
		浜山・流						●千鳥 ●花見	
		東町・鹿部・永浦						●佐谷	
		極田・高木						●南原 ●川原庵山 ●馬渡・束ヶ浦	
		六ノ坪・植松							
		青柳篠林							
		沖ノ島	沖ノ島祭祀遺跡						
		大島	中津富周辺						
		相島	相島墓域					●相島積石塚群(12)	

【凡例】◎：前方後円墳 □：前方後方墳 ●：円墳 ■：方墳

遺跡である。同遺跡は新原・奴山古墳群と同一尾根上に営まれた集落跡で、古墳時代後期前半で終焉する。その後、尾根頂部には新原・奴山古墳群の墓域が拡大しており、居住域移動と連動する事象と評価できる。

北部九州型横穴式石室墳分布の「ドーナツ」化現象 筑紫洲は日本列島最古の横穴式石室墳（北部九州A・B型）が分布する（小嶋二〇二三b）（図4）。この北部九州A・B型を継承し、独自的発展をなしたのが宗像君である（図5）。北部九州A・B型は玄界灘沿岸域を中心に、有明海北部域・瀬戸内海西部域まで分布域を広げるが、その中核を担つた福岡平野・糸島地域では古墳時代中期後半より地上式石室構築（糸島型・北部九州C型・筑紫型）が導入され、半地下式石室構築の北部九州A・B型は中核地より駆逐される。その結果、古墳時代後期には分布外縁域のみに半地下式石室構築が残存する分布の「ドーナツ」状現象が生じた。本現象を生じさせた要因の一翼が宗像君であり、北部九州A型宗像系列、次いで宗像型横穴式石室墳を成立させた。宗像型の特徴は①半地下式の古墳築造手順、②断面合掌形の石室立体空間、③玄門平積み構造等が挙げられる。

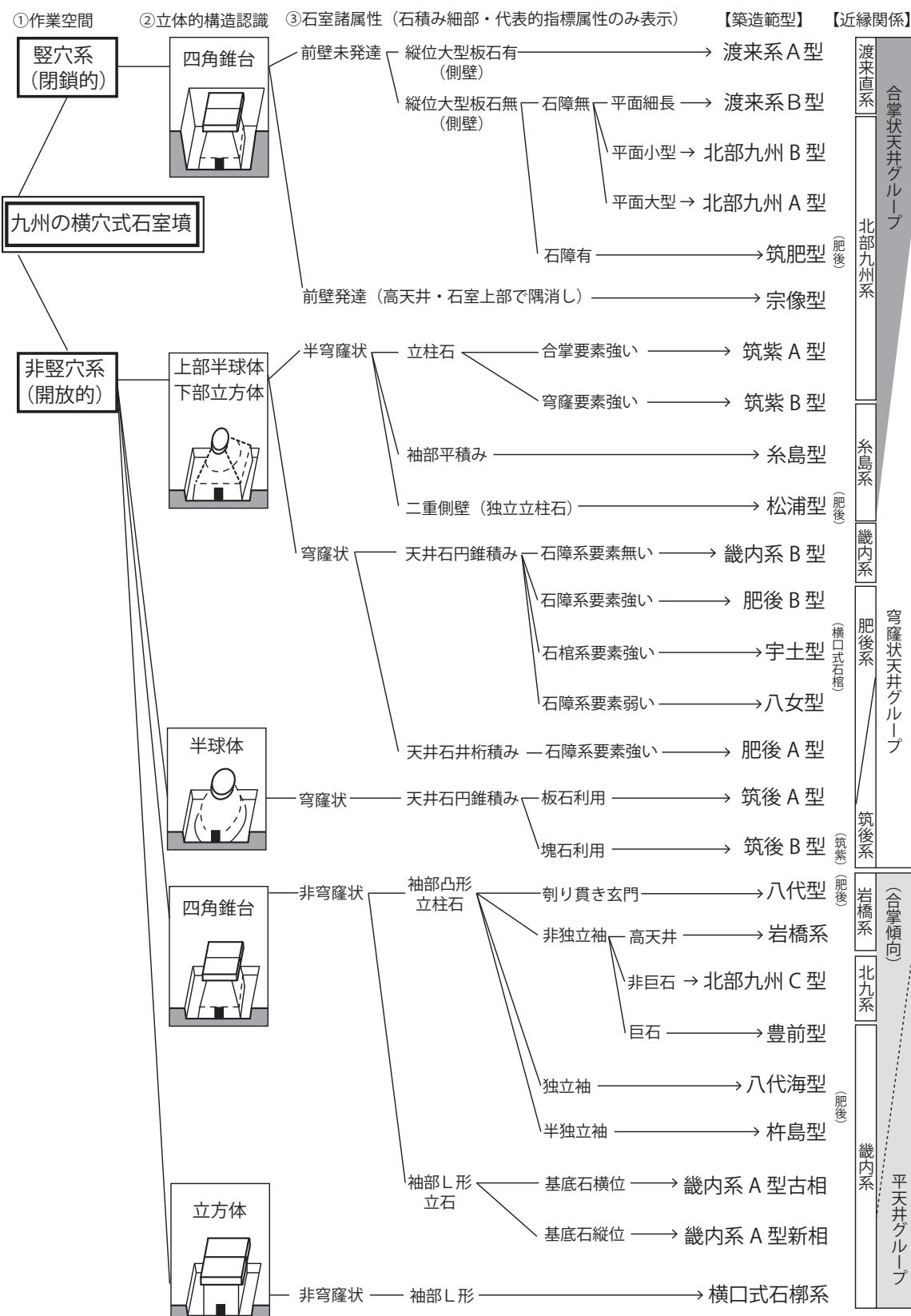
神郡の母体 北部九州A型宗像系列・宗像型横穴式石室墳と排水溝付堅穴建物は、ほぼ分布中心域（宗像第I領域）が重なる（小嶋二〇一二・一二〇二二a、重藤二〇二〇）（図6）。また、同分布域は滑石製祭具の導入範囲とも有機的関係にあり、沖ノ島系祭祀土器の分布域とも重複する。本現象は、古墳時代中期後半には宗像地域の諸集団が「生活・物流・祭祀・墓制」の多面的結合を有し、宗像君を核とする神郡の母体を形成していたことを実証する。加えて、宗像型横穴式石室墳は宗像地域だけでなく、玄界灘・響灘沿岸域の港

湾後背地を中心に飛び地的分布をもつことが判明している。隣接地の遠賀・鞍手地域を除くと、最も分布密度が高いのが志賀島を挟んで対岸に位置する糸島半島西部・福岡平野西端の今津湾沿岸域である。同地では宗像系土師器だけでなく、宗像系須恵器も集中域を形成しており、「物資」でも結合している（太田・椎葉二〇二〇、太田二〇二三）。そして、これら宗像要素が広がる範囲は、終焉段階の前方後円墳分布域とも重なる（小嶋二〇一八・二〇二二a）。つまり、玄界灘沿岸域における前方後円墳の残存には、宗像君が形成した造墓秩序の存在がある。

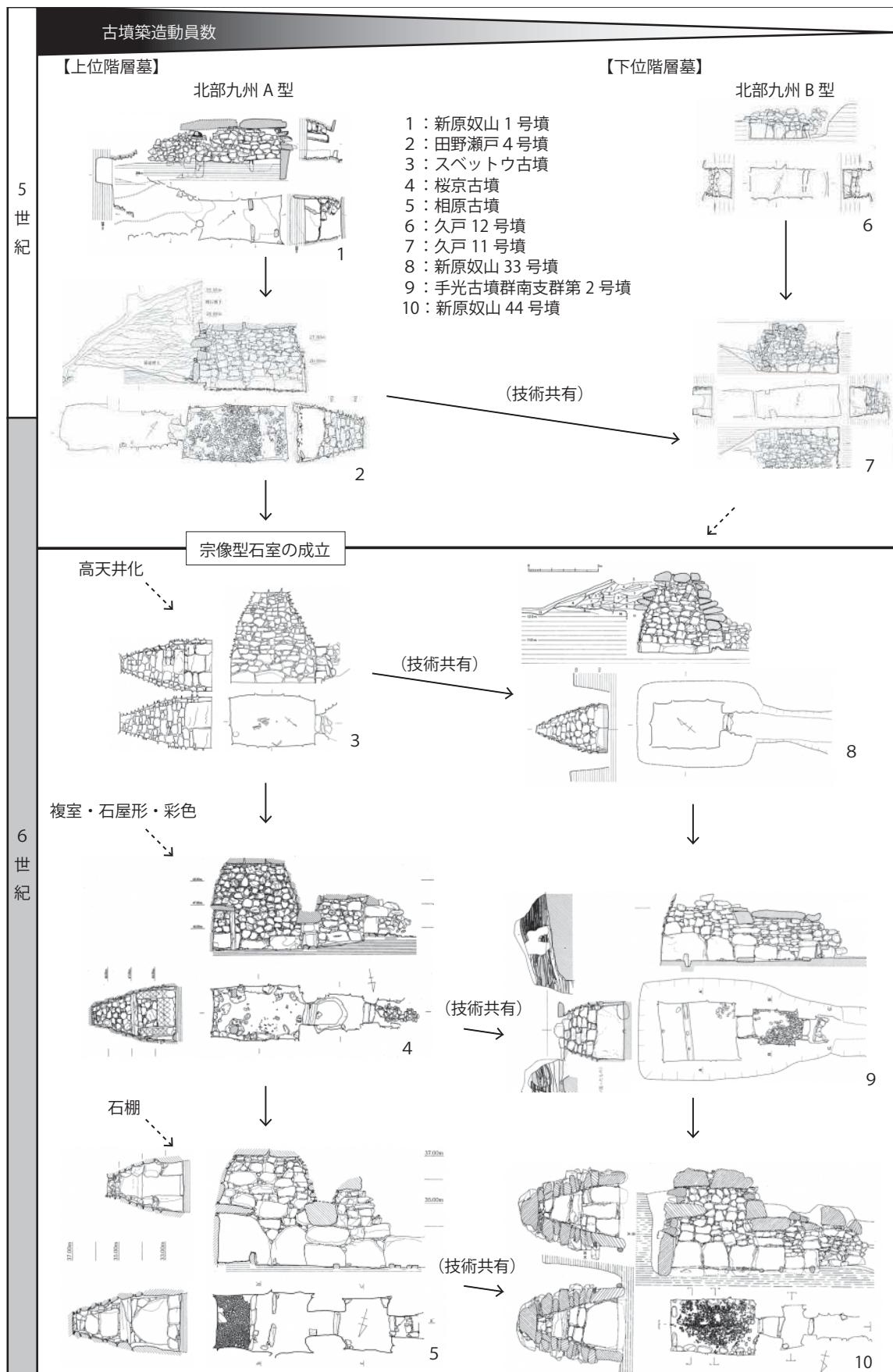
#### （四）沖ノ島系祭祀と宗像神社

沖ノ島系祭祀土器の研究課題 宗像神の奉斎組織整備では、神郡設定と重なる事象として沖ノ島系祭祀土器（穿孔土器）の出現が注目されている（井浦二〇一七、小田二〇一九、笠生二〇一一・二〇一八、白木二〇一八等）。沖ノ島系祭祀土器は宗像地域で生産されたと把握できる一方で、類例が限られてきたため、製作時期等も含めた供給実態の追究が課題となつていた。本課題を克服できる資料が、宗像地域から離れた遠賀川流域西部・井手ヶ浦窯跡群出土品である（小嶋二〇二二a）。後の筑紫国域である遠賀川流域西部は、宗像型横穴式石室墳をはじめとした宗像系要素が複合的に流入する地域であり、宗像君との協力関係、あるいは宗像部の分布といった歴史的事象を投影していると見てよい（小嶋二〇一二・二〇二二a b）。

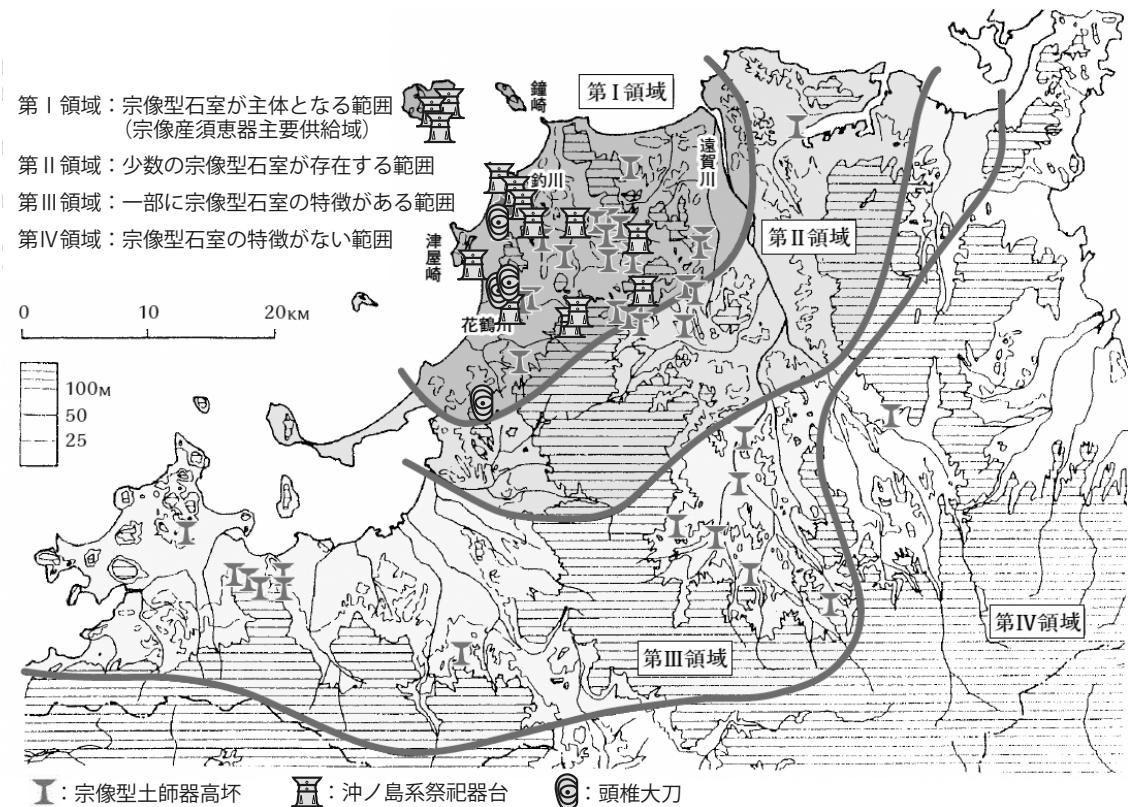
沖ノ島系祭祀土器と沖ノ島一号遺跡の成立 井手ヶ浦窯跡群も宗像窯跡群との相互交流がある「宗像回路」に属してお



第4図 九州における横穴式石室墳の築造範型分類と近縁関係

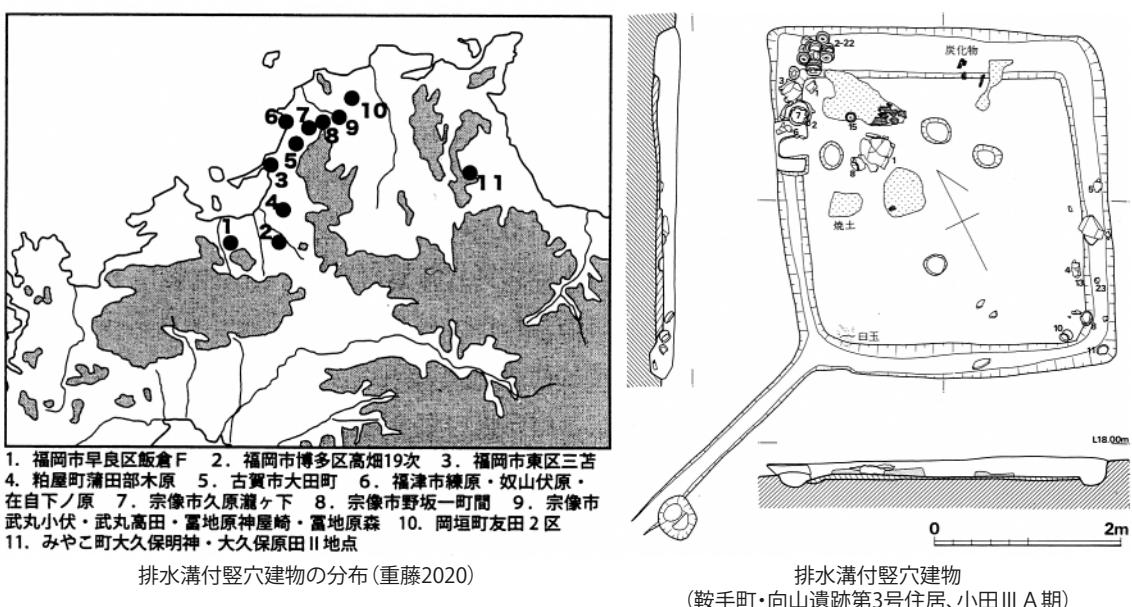


第5図 宗像型横穴式石室墳の成立と展開 (S=1/250)



宗像型石室の分布域（小嶋 2012 等）を基に、①宗像型土師器高壺（重藤分類 Ea 類（重藤 2009）・小嶋 2012）、②沖ノ島系祭祀器台（井浦 2013・2017、小田 2017・白木 2018）、③頭椎大刀（齋藤 2020）を重ねた。④脚付ハソウと垂耳状口縁甕の分布状況（太田・椎葉 2020）を参照すると、第Ⅰ領域が宗像産須恵器の主要供給域と重なることが分かる。また、第Ⅰ領域は⑤有孔円板導入期の範囲や⑥排水溝付竪穴建物の集中分布域とも有機的関係にある（清喜 2018、重藤 2020）。なお、第Ⅲ領域でも今津沿岸域のように、宗像型石室・土師器高壺・脚付ハソウ・垂耳状口縁甕等が集中分布する場所も飛び地的に存在する（小嶋 2012、太田・椎葉 2020）。

第6図 考古資料から導き出された宗像君・宗像部の主要居住域



第7図 宗像地域を中心に広がる排水溝付き竪穴建物 (S=1/200)

り、宗像系須恵器が生産されたことが明らかとなつてゐる（太田二〇二〇・二〇二一四）。本点をふまえた上で、井手ヶ浦窯跡群で検出された飛鳥時代（小田編年VI・VII A期）の堆積層から、沖ノ島系穿孔土器と類似する埴類が数多く出土したことが重要である。同埴類は周辺の墓域（小池横穴墓群等）にも副葬されており、飛鳥時代後半（小田編年VI期）には利用されていると見てよい。つまり、沖ノ島系穿孔土器（埴・沖ノ島一号遺跡）の祖型は、「小田編年VI期の宗像回路製品」であることが確定できる。沖ノ島系穿孔土器が多数出土する沖ノ島一号遺跡は、祭具の大量集積がなされることから形成時期特定に課題があつたが、同結論から飛鳥時代後半（小田編年VI期）には形成がはじまつたと結論できる。

沖ノ島系祭祀土器の構成要素 最古相の沖ノ島系穿孔土器である脚付壺（沖ノ島二〇二号遺跡）も、古墳時代後期後半～飛鳥時代前半（小田編年III B～V期）に盛んに生産された宗像系脚付壺に祖型がある。

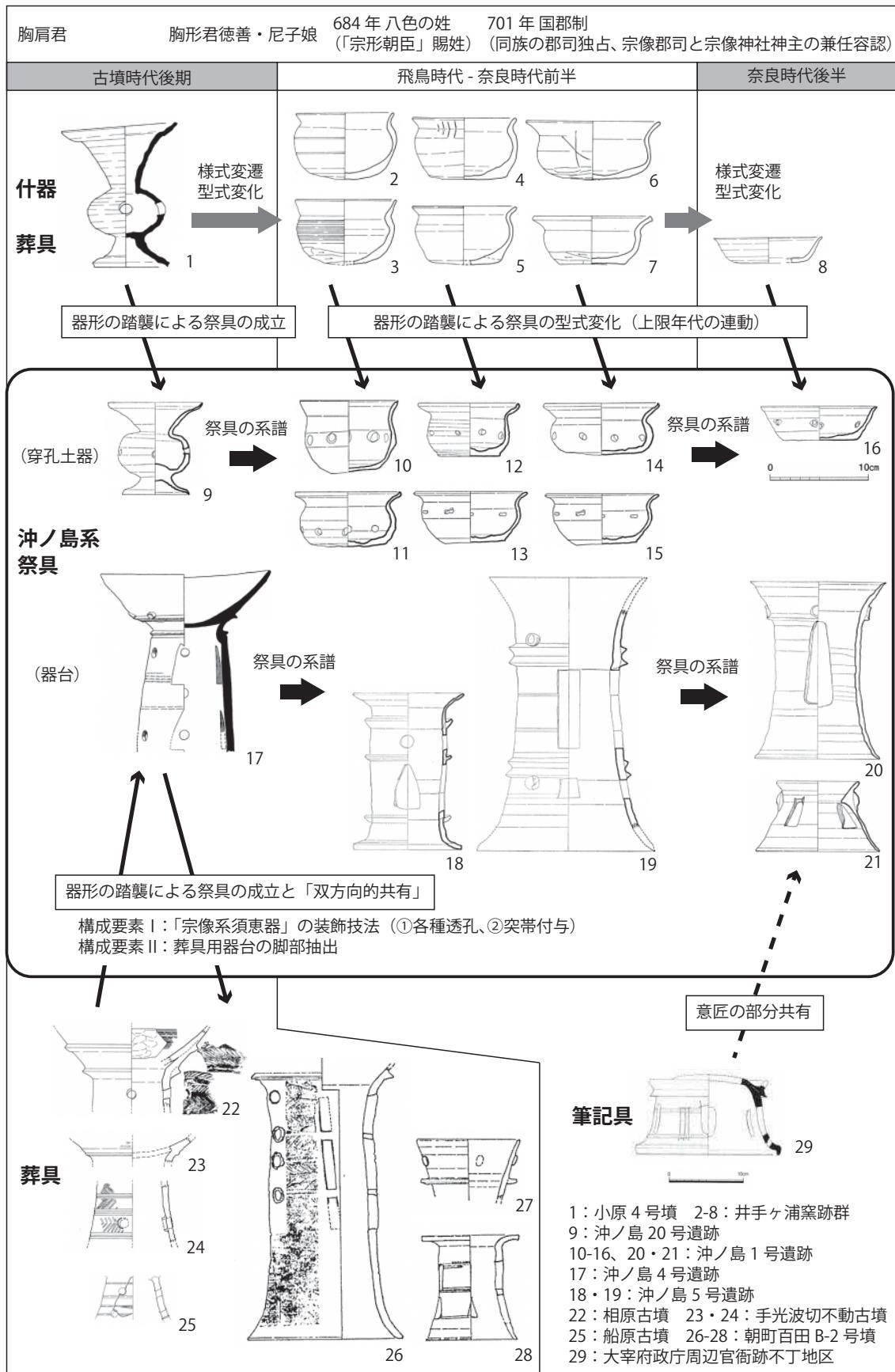
つまり、沖ノ島系穿孔土器の様式・型式変化は、宗像回路製品の様式・型式変化と連動関係（上限年代を共有）にある（図8）。沖ノ島系祭祀器台も、相原古墳・手光波切不動古墳等の首長墓出土品に類例があることが知られており、とくに沖ノ島四号遺跡出土品の存在から、古墳・祭場間で共通した器台が用いられたことが確認できる（井浦二〇一三・二〇一七、白木二〇一八）。筆者は、小田編年VI期以降に主体的に用いられる沖ノ島系筒形器台は、「①葬具用器台の脚部抽出」と「②宗像回路製品の装飾技法」を組み合わせた祭具と考えている。

沖ノ島系祭祀土器と神社組織の整備 以上のように、沖ノ島系祭祀土器の母体は、通時的に宗像地域と遠賀川流域西部で連結してい

た「宗像回路」にあつたと結論でき、本回路は古墳時代後期における豪族間の協力関係により形成された。同結論とあわせて注目できるのが、沖ノ島祭祀遺跡出土須恵器に複数の「焼損品・未使用品」が内包されている点である（小嶋二〇二二b）。瓶類胴部に亀裂がある以上、貯蔵具・供膳具として利用されておらず、あくまで「祭具」として沖ノ島まで運搬されたと把握できる。灰被りや溶着、焼成による歪みをもつ須恵器が、遠く沖ノ島まで運搬されている事実は、「製品から祭具を選択する方式」に加えて、「祭具のみを製作する方式」が成立したことを意味する。①沖ノ島系祭具の成立（笛生二〇一）と②焼損品・未使用品の搬入（小嶋二〇二二b）は、祭具のための一括製作（神事）が宗像神社で行われはじめたことを示しており、宗像神社内に「物忌」相当の職制が整備されたことと同義と考える。

### （五）小結－宗像神社の組織的整備過程－

宗像神の奉斎では、玄海灘沿岸域の在来信仰体系を基盤に、倭政権の祝派遣（大王直祭型）を契機とした組織的整備がはじまる（小田二〇一九）。祝派遣による倭政権中枢の祭式導入は、在来信仰体系の祭式も変容したことが、導入期滑石製祭具の分布から実証できる（清喜二〇一八）。その分布域は北部九州A型宗像系列・宗像型横穴式石室墳の分布域（宗像第一領域）と重複する。本造墓秩序の形成と勝浦潟の面的開発を進めたのが、宗像君一族であり、在来集団と渡来集団を組織化することで同地域の集団統合を進めた。津屋崎古墳群の造営と造墓秩序の形成から、「宗像君」としての氏族的結集・首長権統合は、古墳時代中期（五世紀中頃）を画期とし、初



第8図 「宗像系須恵器」と沖ノ島系祭祀土器の系譜関係 (1-16 : S=1/6、17-29 : S1/8)

期段階から多系列構造（同族集団的性格）を有していたことがうかがえる。倭政権主体の大王直祭型から委託祭祀型への移行も、氏族的結集の動態と双方向的関係を有していたと考えられる。以上のようない動態により、宗像君一族を祝とする宗像神社の基盤が整えられた。

沖ノ島祭祀遺跡の祭式・祭具・幣帛は、古墳時代中期後半以後の委託祭祀型に移行された後も、古墳での葬式・副葬品の変遷とも歩調をあわせる形で改良がなされる。神社組織の整備段階を把握する上で重要なのは、宗像神の奉斎に特化した「沖ノ島系祭祀土器」の成立であり、その上限は飛鳥時代後半（七世紀後半・小田編年VI期古相）に位置づけられる。祭具の一括製作（神事）は、当該期に宗像神社の神社組織整備が進展したことを意味しており、神郡成立に後続する現象と結論できる。

### 三、国境域における防衛機構

軍事的施策と宗教的施策の検討結果を統合し、唐・新羅軍の来襲に備えた飛鳥時代（六六三年以降）の防衛機構を考察する。

#### （一）筑紫大宰の軍事動員

倭政権の軍事動員要請 壬申の乱（六七二年）勃発時、近江朝は筑紫大宰・栗隈王に対し軍事動員要請を行つた。本要請と筑紫大宰の返答「筑紫國者、元成邊賊之難也。其峻城深隍臨海守者、豈爲内賊耶・・・（後略）」【『日本書記』卷第二十八】から、「①筑紫大宰が筑紫の軍事動員を管轄していたこと」、「②古代山城等の軍事施設

を管轄していたこと」が把握でき、倭政権の国境防衛機構において筑紫大宰が中核的役割を果たしていたと評価できる。以下では、筑紫大宰が動員可能であった軍隊を検討する。

筑紫大宰の私的軍隊 筑紫大宰に任じられた王族・豪族個人の直轄軍隊は、人格的結合で繋がる同族集団である。上記の近江朝による軍事動員要請時に、栗隈王の二子「三野王・武家王」が筑紫大宰の身辺警備を担つていた（註10）。本記事は特殊記事であるが、『日本書紀』に記された軍事動員体系や古墳築造の動員体系をふまえると、同族集団の動員は古墳時代において普遍的な存在であったと評価できる。飛鳥時代では孝徳朝の天下立評により、私的動員の象徴である大規模古墳築造は公的に抑制されたが、戦時における動員体系としては実質的には機能し続けている。壬申の乱における倭京奪取、その起点となつたのも大伴系氏族の私的結集であつたことが『日本書紀』からうかがえる（註11）。

筑紫大宰の公的軍隊 上述した同族集団動員は私的動員であり、筑紫大宰の場合は任地となるため、動員数もより少ないと見込まれる。筑紫大宰としての公的動員としては、「防人」と「国造軍」が存在する。総兵数約二〇〇〇名と見られる防人は、対馬・壱岐・筑紫国等に分散配備された常備軍である。防人は外敵襲来時における「①情報収集・伝達」と「②対処的迎撃」を担つた。防人に対し、筑紫大宰管轄下の主力軍隊となる国造軍は、戦時に際して臨時徵兵される軍隊であり、平時は筑紫洲各地に分散する。つまり、国境域における組織的防衛（水城前面における迎撃等）を実行するには、防人による外敵確認・情報伝達を経て、「筑紫大宰（朝廷）の戦時認定と国造軍徵発」を経なければならない。以上の国造軍動員

過程をふまえると、国境域の防衛において、いかに迅速に部隊を開けるかが重要な要素となつていて、その前提となるのが、筑紫に分散する国造軍の戦力化、組織的抵抗力の維持であり、「遊兵」化（戦線離脱・逃散）することを抑止しなければならない。「戦場」となる筑紫洲北部の人口密集地近傍に配された古代山城は、各國造軍を戦力化する軍事動員基点としての役割も担つていたと考えられる。

## （二）古代山城と神郡

**古代山城とミヤケ分布の空白地** 戦場となる筑紫において、玄界灘沿岸航路の要地で人口密度も高い宗像地域（宗像第I領域）は、古代山城分布の空白地となる。古代山城未完成論もふまえると、本空白には不確定要素もあるが、国史記載の古代山城、すなわち国家が重要視した古代山城は築かれていなくては有力視できる（亀田二〇一八）。あわせて、宗像地域には古代山城だけでなく、ミヤケを設置した史料が確認できないことも注目できる。筑紫君磐井の乱後、筑紫洲北部には重点的にミヤケを設置し、那津官家には有事に備えて各地の屯倉から穀物を輸送・備蓄させた。このような倭政権の直轄組織が、史料上では玄界灘航路の要衝・宗像地域に見出せない（図9）。また、筑紫君磐井の乱の後、筑紫洲北部に広がった物部・大伴系部民、次いで丁未の乱（五八九年）・久米皇子の筑紫進駐（六〇二年）を経て拡大した上宮王家の部民分布を見ると、宗像郡域では唯一、「難波部安良壳（『類聚国史』五四、節婦、天長五年（八二八年））にその痕跡を見るに過ぎない（図10・11）（酒井二〇〇九）。現存史料を見る限り、宗像地域においては、王家・中

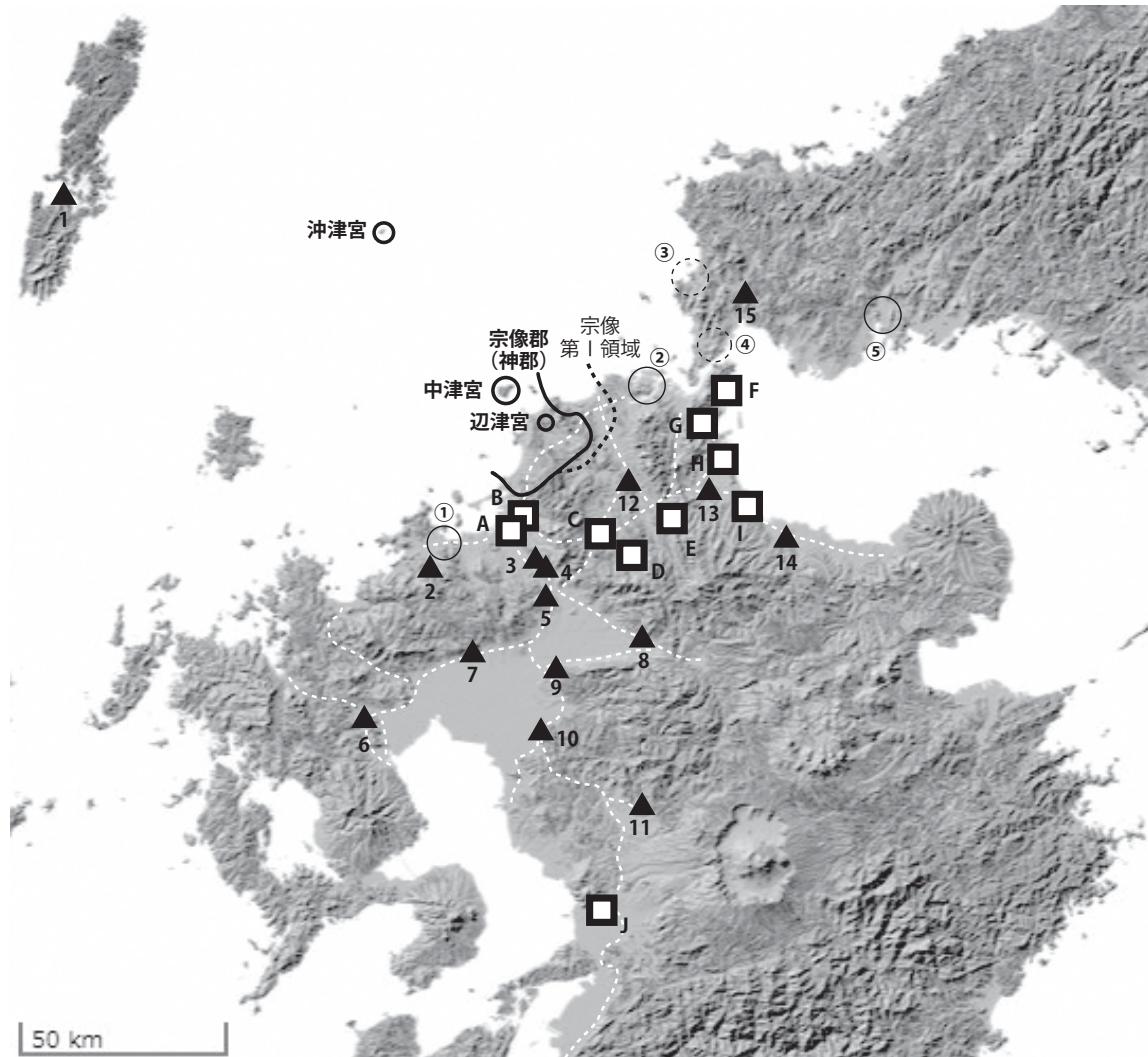
央豪族に帰属する部民は少なかつたと評価できる。ただし、考古資料に基づく宗像第I領域内では、その最外縁（後の遠賀郡域）となる遠賀潟周囲において、中央豪族・王家の部民が多数存在したと見られる。遠賀潟は玄界灘航路と筑紫・豊にまたがる大河・遠賀川の結節点となる港湾であり、その後背地には「鉄器生産の村々（尾崎・天神遺跡、瀬戸遺跡等）」が連なつていて（小嶋二〇二三一b）。居住地に隣接する尾崎・天神一号墳に三輪玉着装の倭装大刀が副葬されている点もふまえると、同地の豪族を伴造に任命し、鉄器貢納を推し進めたと理解できる。これら村々の西辺を流れる矢矧川は、物部系部民の矢作部に縁があると想定されており、考古資料の様相と親和的である（酒井二〇〇九）。

以上のような宗像地域を本貫地として、古墳時代中期より台頭してきた豪族が宗像君である。

**倭政権と宗像君の関係** 宗像君は宗像神の奉斎（沖ノ島祭祀）・玄界灘航路で倭政権と直結しつつも、「県主」・「国造」に就かず、相対的自立性を維持した特異な豪族である。加えて、宗像君が奉じる宗像神は、神威の強い神であり、中央豪族による充神民の割譲を抑止し、むしろ、渡来系技術者（縫工女・兄媛）の奉獻を要請する説話すら、『日本書紀』に記されている。

飛鳥時代に成立した大海人皇子と尼子娘の婚姻も、対朝鮮半島政策の円滑化に向けて、玄界灘航路を掌握していた宗像君との関係強化を図る政治的判断であつたことが有力視されている。皇位継承の有力候補との婚姻という事実は、百濟救援戦争以前における倭政権と宗像君の絶妙な距離感を感じさせる。

宗像神を頂点とした宗像君の相対的自立性は、「神郡・宗像郡」



#### 〔ミヤケ比定地〕

A: 那津官家 B: 糟屋屯倉 C: 穂波屯倉 D: 嘉麻屯倉 E: 我鹿屯倉 F: 膝崎屯倉 G: 大拔屯倉 H: 肝等屯倉 I: 桑原屯倉 J: 春日部屯倉

#### 〔古代山城・土壘 (防壁)〕

1: 金田城 2: 雷山古代山城 3: 大野城・水城・小水城群 4: 阿志岐古代山城 5: 基肄城・関屋土壘・とうれぎ土壘  
 6: おつぼ山古代山城 7: 帯隈山古代山城 8: 柏木古代山城 9: 高良山古代山城・上津土壘 10: 女山古代山城  
 11: 鞠智城 12: 鹿毛馬古代山城 13: 御所ヶ谷古代山城 14: 唐原古代山城 15: 長門城 (推定地)

#### 〔宗像郡 (神郡) と宗像第1領域〕

『和名類聚抄』に記載された郷比定に基づく宗像郡域。宗像第1領域は宗像型横穴式石室墳・石室内非土器副葬・宗像系須恵器・宗像系土師器等を複合的に共有する分布域で、宗像君・宗像部の主要居住域と判別する。

#### 〔宗像要素の飛び地的分布域〕

##### ①: 今津湾沿岸域

古墳時代後期（6世紀）より、宗像型横穴式石室墳・宗像系須恵器・宗像系土師器が局所的に集中分布する地域で、寄港地として宗像君一族が日常的に利用していた港湾と判断できる。宗像君の部曲（私有民）である宗像部も分布していたと見るべきで、『筑前国嶋郡川戸里戸籍』（大宝二年・702年）でも宗像部の居住が確認できる。

##### ②: 洞海湾沿岸域

古墳時代後期（6世紀）より、宗像型横穴式石室墳・宗像系須恵器・宗像系土師器が分布する地域で、寄港地として宗像君一族が日常的に利用していた港湾と想定できるが、発掘調査による資料蓄積は途上段階にある。

##### ③: 韶灘西岸域 ④: 関門海峡沿岸域

宗像地域と同じく北部九州 A型横穴式石室墳が残存する地域であり、韶灘南岸域や遠賀川流域の人々と交流関係にある。

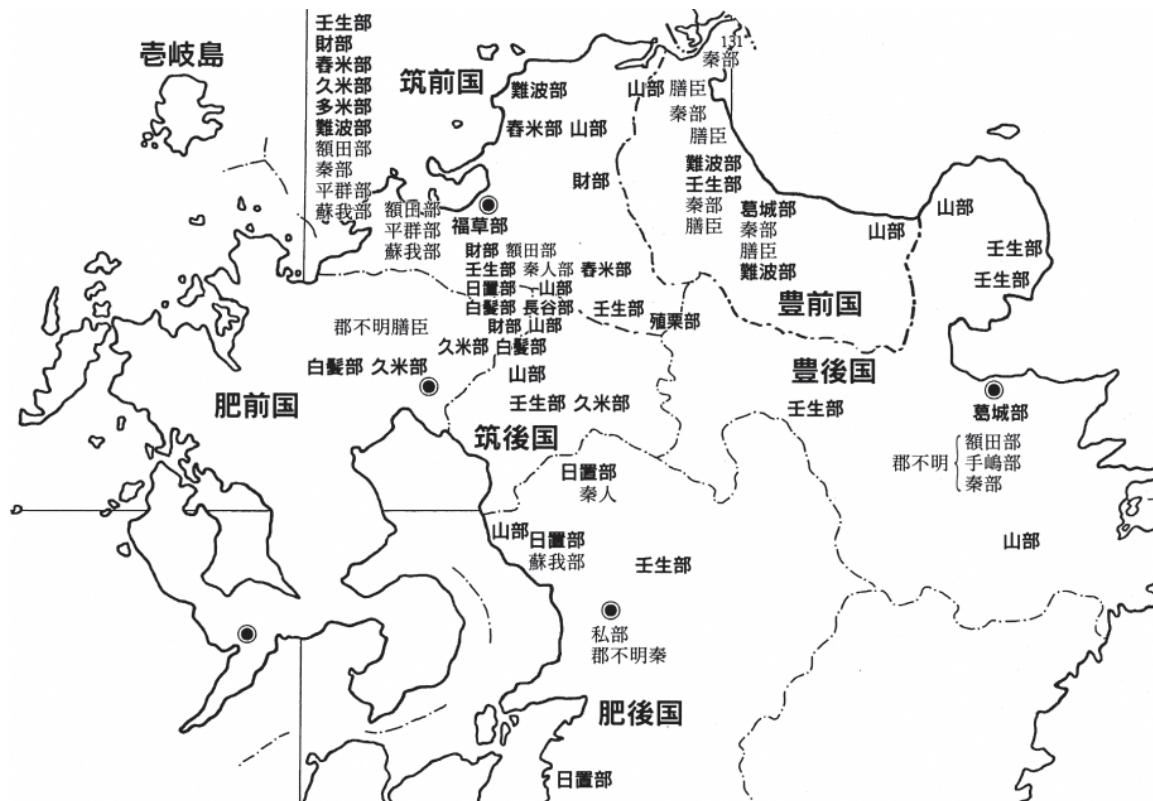
##### ⑤: 山口湾沿岸域

宗像地域と同じく北部九州 A型横穴式石室墳が残存する地域。発掘調査により石室内非土器副葬・石室外土器供献・宗像系須恵器・宗像系土師器の分布が確認されており、宗像君一族と墓制・物資で複合的な繋がりを有する。

第9図 ミヤケ・古代山城と宗像・神郡の地理的関係



第10図 物部氏・大伴氏・崇峻朝氏族將軍関係部民の分布（酒井 2009）



第11図 上宮王家関係部民の分布（酒井 2009）

として律令国家に組み込まれ、宗像君（宗形朝臣氏）一族による政教一致の支配（宗像郡司・神主の同族独占）は奈良時代を通じて存続した。

#### 宗像君の動員力 史料上で認められた宗像君の相対的自立性を実

証するのが、上述した宗像型横穴式石室墳をはじめとする考古資料であり、葬送儀礼（石室内非土器副葬・石室外土器供献・墳丘上土器供献）とあわせた伝統的前方後円墳墓制の継承が特筆される。堅穴系埋葬施設の古墳築造・葬送儀礼を独自的に発展させた宗像型墓制は、古墳時代後期の宗像地域に排他的分布域・宗像第I領域を形成する。同分布域形成の主要因となつたのは「宗像君－宗像部」という主従関係であり、古墳造営における宗像君の直接動員範囲が反映されている。その範囲は、宗像郡郷比定の検証を経て、神郡と重なることがより明らかとなつた（大高二〇一七・松川二〇三四）。

また、宗像型横穴式石室墳・宗像系須恵器・宗像系土師器の分布は、瀬戸内海西部から糸島半島の港湾にかけて飛び地的に広がつており、航路に沿つた宗像部の分布を反映する。寄港地における墓制と物資流通を共有する集団の広がりこそが、宗像君による玄界灘航路運航の存立基盤である（小嶋二〇一二二〇二二bc）。

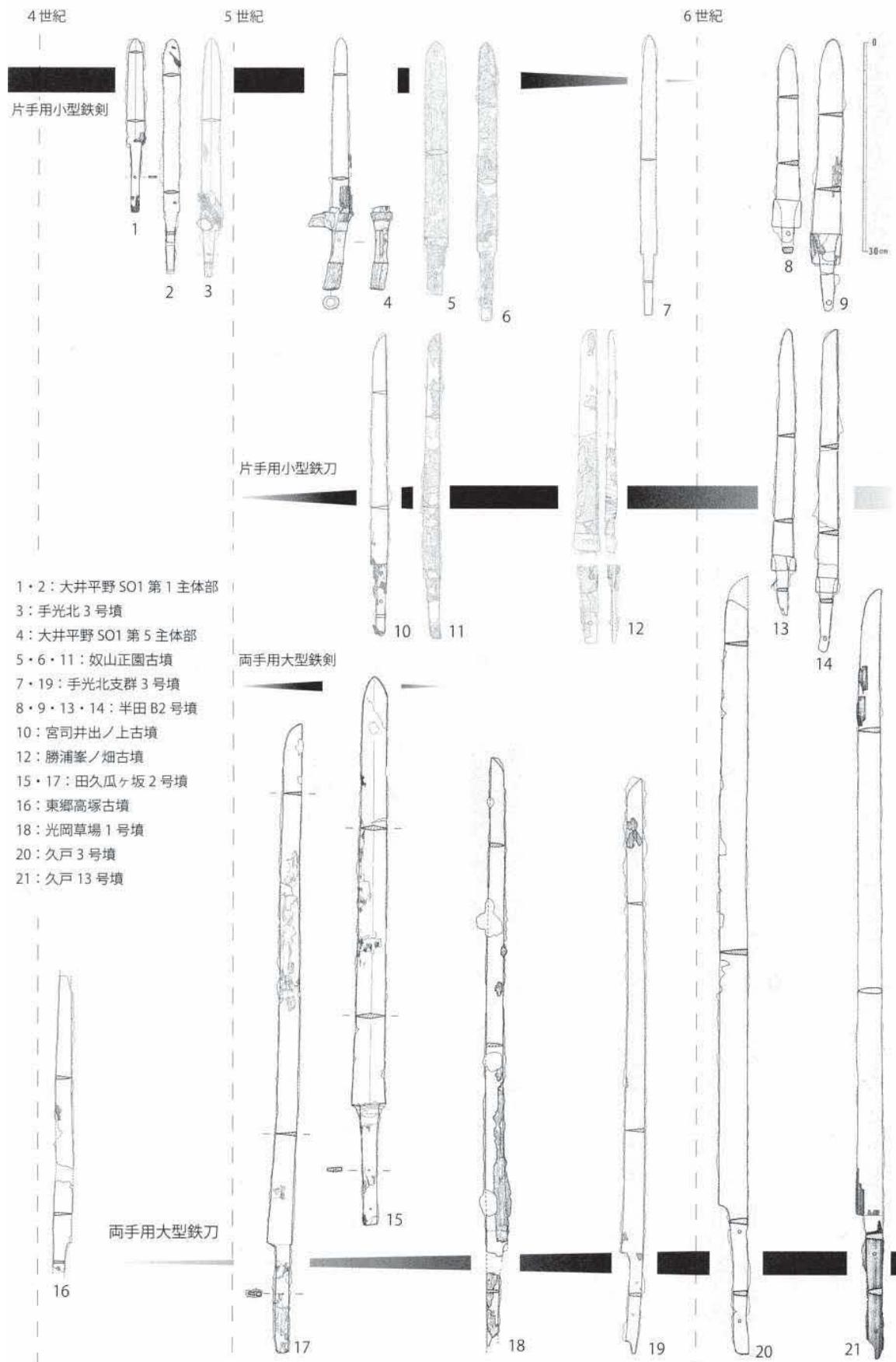
「宗像君－宗像部」という強固な同族集団の形成は、①族長が宗像神社神主を兼帶したこと、②族長級上位階層が多系列構造であつたこと、③各世代の族長と服属集団間に婚姻関係が結ばれていたことによる。『類従三代格』延喜一七年（七九八年）一〇月

一一日太政官符から宗形朝臣氏は、「宗像神主新任の日に嫡妻を捨て、多くの百姓女子を神社の采女として娶つて妾とする」ことを慣習化していたと把握できる（龜井二〇一一）。本風習は古墳時代遺

制であり、宗像君の族長・神主就任時に複数の服属集団との婚姻関係（人的結合）を再構築していたことをうかがわせる。したがつて、「宗像君－宗像部」という同族集団内には、累代的な血縁的紐帶関係が形成されていたと想定でき、本紐帶関係を媒介として一〇〇m級の前方後円墳を同時並行で築造できる動員力を維持し続け、かつ排他的な墓制分布を表出させたと考える。

宗像君の武装具 宗像君が台頭した古墳時代中期は、倭政権中枢の工房で製作された武装具が地方豪族に分配され、列島規模で武装具の斉一性が高まる。近接戦闘武器としての鉄刀も「威信財」的性格を強め、古墳時代後期に向けて漸移的に刀身幅・刀身長を大きくし長大化が進む（斎藤二〇二四）。その状況下で宗像地域の上位階層墓出土品、すなわち宗像君が蓄えた武装具では、「片手用小型鉄劍・鉄刀」が卓越する（小嶋二〇二二d）（図12）。片手用小型鉄劍・鉄刀は成人男性の腰回りとほぼ同じ長さであり、船上等の閉鎖空間での立ち回りで利便性が高く、航路・港湾との結びつきが強い宗像君の氏族的特徴を反映した武装具と評価できる。このような「片手用小型鉄劍・鉄刀」の卓越は、現状の発掘調査で宮司井手ノ上古墳・奴山正園古墳段階から勝浦峯ノ烟古墳段階まで確認でき、古墳時代中期を通じて維持される。古墳時代後期以降は副葬品組成が判別でききる良好な事例が限られるが、列島的動態と歩調をあわせて「威信財」的性格が強い装飾付大刀の副葬が重視されるようになる。その極地とも言えるのが、宮地嶽古墳出土巨大頭椎大刀の副葬である。

以上の動態を整理すると、宗像君の氏族的結集が始まった段階では、副葬品選定において船上等で日常的に用いていた「片手用小型鉄劍・鉄刀」を重視していたが、氏族としての安定期に入った段階



第12図 宗像地域の鉄劍・鉄刀の変遷 (S=1/8)

の上位階層では、倭政権下の身分表象的性格を有した装飾付大刀を重視するように変遷したと理解できる。

### (三) 小結—国境域防衛と神郡—

筑紫大宰自らが臨戦する大宰府城塞群は、中世城郭に比して広大であり、万単位の大規模動員なくして防衛施設としては十分に機能し得ない。この大規模動員が実現可能な動員方式は、百濟救援戦争直後の古代山城築城期において国造軍の他にない（註12）。その主力となるのは、筑紫大宰の任地である筑紫の国造軍であり、五五四年の対新羅戦や六六〇～六六三年の百濟救援戦争といった倭政権の軍事動員に参戦し続けてきた。筑紫国造軍成立の契機となつたのは、筑紫君磐井の乱であり、『日本書紀』・『筑後国風土記』逸文では磐井を「筑紫国造」と表記する。筑紫における国造制の施行は磐井の乱後と見られるが、葛子以降の筑紫君族長が国造を世襲していたと考えられる（篠川二〇二一・酒井二〇二四）。つまり、県主・国造就任、ミヤケ設置、部曲割譲等を経て、倭政権に臣従した豪族を中心に国造軍が組織された。筑紫国は日本列島有数の人口密集地であり、同国域唯一の国造である筑紫国造には相応の負担が求められただろう。国造に課された負担の一つが兵役であり、筑紫国造軍は、筑紫君一族を中心に大伴部等の他氏族も参集して部隊を編成したと見られる（酒井二〇二四）。つまり、筑紫洲での外征軍編成において、兵数負担は筑紫君とその同族集団に偏っていたと想定され、宗像君の負担は相対的に少なかつたと考えられる。

本想定を傍証するのが、朝鮮半島・日本列島での戦争記事であり、宗像君・宗像部を戦場に投入した史料はなく、筑紫君・筑紫国造の

みが史料に記載される。また、考古資料では筑紫君一族が愛用した飛燕式鉄鎌が筑紫国西部から肥後国北部、那津一三国丘陵一八女一菊鹿という筑紫縦貫道沿いに分布域を広げる一方で、宗像地域での出土数は限られる。つまり、鉄鎌形式共有の機会として、筑紫君と宗像君が軍事活動を供にした形跡は乏しい。加えて、両者の古墳築造範型（古墳をつくる際の集団行動方式）を比較すると、六世紀以後の筑紫君は地上式石室構築の八女・筑後型、宗像君は半地下式石室構築の宗像型を採用しており、古墳築造手順自体を根本的に違え、技術共有状況から動員重複を見出し難い（註13）。

一方で宗像君は宗像神の奉斎を委任されており、玄界灘航路の運行でも積極的に協力していたと考えられ、倭政権の政策に極めて従順であつたと評価できる。宗像神への丁重な奉斎を実現するために、宗像君は国造・県主に就かず、ミヤケ設置や部曲割譲も積極的には行わなかつた。古代山城築城期においても、宗像地域は宗像神が坐すため、同地の充神民を動員する古代山城の築城は、宗像神の神意を損ねる畏れも危惧されただろう。また、宗像君・宗像部は累代の血縁的紐帶関係で結ばれており、玄界灘沿岸航路沿い地域での大規模動員力を保持していた。外敵襲来時ににおいては、宗像神奉斎のため、まさしく「死兵」となつて組織的抵抗を行うことが見込まれていたと考える。宗像君が氏族的結集を進めた古墳時代において、実用的な「片手用小型鉄劍・鉄刀」が重視されたことからも分かるよう、「武威」も同一族の存立基盤であった。

おわりに

本研究では、倭政権の軍事的施策と宗教的施策を試みた。軍事的施策の一つとして施行された古代山城の築城は、古墳時代後期より整備されてきた戦時侵攻体制（軍事動員・物資備蓄）上に存在しており、筑紫縦貫道をはじめとする交通路や拠点的ミヤケの分布とも一定の相関関係をもつ。外敵襲来時の「戦場」となる筑紫はその傾向が顕著である。玄界灘航路の要衝である宗像地域は、拠点的ミヤケ・古代山城分布の空白地であるが、同地は倭政権が宗像神に奉じた充神民の居住地である。飛鳥時代後半（七世紀後半）には神郡が設定され、古代山城築城期における倭政権の宗教的施策として重要視されていた。神郡郡司・宗像神社神主を同族のみで独占する宗像君と、その服属集団である宗像部は玄界灘航路沿いの港湾に分布し、古墳時代中期以後、筑紫君とならぶ大規模動員力を古代山城築城期にも保持していた。つまり、宗像神が坐す神郡は、軍事と宗教の両面で守護された土地であったと評価できる。

総括すると、「戦場」となる筑紫での古代山城配置には、地質環境や交通路といった即物的な軍事要因だけでなく、①各國造軍を率いる氏族の歴史的実績や、②倭政権の国家的宗教体系も反映していると結論できる。

註

1 ..既而天皇謂高市皇子曰「其近江朝左右大臣及智謀群臣共定議、今朕無與計事者、唯有幼少孺子耳。奈之何。」皇子、攘臂案劍奏言「近江群臣、雖多

何敢逆天皇之靈哉。天皇雖獨、則臣高市、賴神祇之靈、請天皇之命、引率諸將而征討。豈有距乎。」爰天皇譽之、携手撫背曰「慎不可怠。」因賜鞍馬、悉授軍事。皇子則還和顰。天皇於茲、行宮興野上而居焉。此夜、雷電雨甚。

天皇祈之曰、天神地祇扶朕者雷雨息矣。言訖即雷雨止之。【『日本書紀』卷第二十八】等

2 ..天萬豐日天皇、天豐財重日足姬天皇同母弟也。尊佛法、輕神道斬生國魂社樹之類、是也。爲人柔仁好儒。不擇貴賤、頻降恩勅。【『日本書紀』卷第二十五】等

3 ..丁亥、高市皇子、遣使於桑名郡家、以奏言「遠居御所、行政不便。宜御近處。」即日、天皇留皇后而入不破。【『日本書紀』卷第二十八】等

4 ..朴市田來津獨進而諫曰「避城與敵所在之間一夜可行、相近茲甚。若有不虞、其悔難及者矣。夫飢者後也、亡者先也。今敵所以不妄來者、州柔設置山險盡爲防禦、山峻高而谿隘、守易而攻難之故也。」【『日本書紀』卷第二十七】等

等

5 ..ムナカタの表記には、胸肩・胸形・宗形等があるが、本稿では原文引用を除き、「宗像」で表記を統一する。

6 ..是月、阿知使主等自吳至筑紫、時胸形大神有乞工女等、故以兄媛奉於胸形大神、是則今在筑紫國御使君之祖也。【『日本書紀』卷第十】

7 ..五年春三月戊午朔、於筑紫所居三神、見于宮中、言「何奪我民矣、吾今慚汝。」於是、禱而不祠。

冬十月甲寅朔甲子、葬皇妃。既而天皇、悔之不治神祟而亡皇妃、更求其咎、

或者曰「車持君、行於筑紫國而悉校車持部、兼取充神者。必是罪矣。」天皇則喚車持君、以推問之、事既得實焉。因以、數之曰「爾雖車持君、縱檢校天子之百姓、罪一也。既分寄于神車持部、兼奪取之、罪二也。」則負惡解除・善解除而出於長渚崎令祓禊。既而詔之曰「自今以後、不得掌筑紫之

車持部。」乃悉收以更分之、奉於三神。【『日本書紀』卷第十二】

8..九年春二月甲子朔、遣凡河内直香賜與采女、祠胸方神。香賜、既至壇所香賜、此云舸扱夫及將行事、斬其采女。天皇聞之曰「詞神祈福、可不慎歟。」

乃遣難波日鷹吉士將誅之、時香賜退逃亡不在。天皇復遣弓削連豐穗、普求國郡縣、遂於三嶋郡藍原、執而斬焉。【『日本書紀』卷第十四】

9..次納胸形君德善女尼子娘、生高市皇子命。【『日本書紀』卷第二十九】

10..男、至筑紫時、栗隈王、承符對曰「筑紫國者、元成邊賊之難也。其峻城深隍臨海守者、豈爲內賊耶。今畏命而發軍、則國空矣。若不意外有倉卒之事、頓社稷傾之。然後雖百殺臣、何益焉。豈敢背德耶、輒不動兵者其是緣也。」時、栗隈王之二子、三野王・武家王、佩劍立于側而無退。【『日本書紀』卷第二十八】

11..當是時、大伴連馬來田・弟吹負、並見時否、以稱病退於倭家。然知其登嗣位者必所居吉野大皇弟矣。是以、馬來田、先從天皇。唯吹負、留謂立名于一時欲寧艱難。即招一二族及諸豪傑、僅得數十人。【『日本書紀』卷第十二】

12..天武天皇一二年（六八三年）～一四年（六八五年）の国境画定により国造制が廃止されたという理解から、国造制と評制が重層的に維持されたという立場をとる（篠川二〇二二）。国造制・評制という行政組織と一体化した軍事組織の名称を「国造軍」・「評造軍」と呼ぶかは意見が分かれるが、天武・持統朝の行政・兵制改革が実行される前段階では、百濟救援戦争時と同質の兵制であつたと把握する。

13..新相の宗像型横穴式石室墳に採用される複室構造は、肥後北部・筑後を分布核とする石室空間設計であり、筑紫君と関係が深い。ただし、その伝播は連鎖的に生じる場合が多く、宗像地域の場合は、通時的に関係がある遠賀川流域と石棚とともに複室構造を共有したと把握できる。

## 参考文献

井浦一二〇一三『津屋崎古墳群III』福津市文化財調査報告書第七集 福津市教育委員会

井浦一二〇一七「胸肩君の領域」『季刊邪馬台国』一三三号 梓書院  
井上信正一二〇二四「大宰府条坊」『季刊考古学・別冊四六 九州考古学の最前线』

線2『雄山閣

石木秀啓一二〇一九「西海道北部の土器生産・牛頸窯跡群を中心として」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第一集 九州国立博物館

上田龍児一二〇二四「筑紫地域の集落動態」『律令国家成立期の地域動態I』研究報告資料 奈良文化財研究所

近江俊秀一二〇一八『入門歴史時代の考古学』同成社

大高広和一二〇一七「古代宗像郡郷名駅名考証（三）」『沖ノ島研究』第三号「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

太田智・椎葉実郁一二〇二〇「福岡市広石II・二号墳出土須恵器の再検討」『七隈史学』第二二号 七隈史学会

太田智一二〇二〇「九州の須恵器甕からみた地域性と地域間交流」『福岡大学考古学論集3』武末純一先生退職記念事業会

太田智一二〇二三「宗像周辺の7世紀代の動態・古墳・須恵器生産を中心とする集落と古墳の動態IV」第二四回九州前方後円墳研究会

太田智一二〇二四「三古墳時代のくらしと生業」『新修宗像市史』宗像市

小田富士雄一二〇一六「大宰府都城の形成と東アジア」『季刊考古学』第一三六号 雄山閣

小田富士雄一二〇一九「宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果」『大宰府学研究』『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第一集九

州国立博物館

亀井輝一郎二二〇一一「古代の宗像氏と宗像信仰」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

亀田修二二〇一三「古代宗像の渡来人」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告Ⅲ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

亀田修二二〇一八「繕治された大野城・基肄城・鞠智城とその他の古代山城」『大宰府の研究』高志書院

木村龍生編二〇一五『鞠智城跡出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究』歴史公園鞠智城・温故創生館

木村龍生二二〇一六「土器の様相からみた古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会

藏富士寛二二〇一「玄界灘沿岸」『九州島における古墳埋葬施設の多様性』第一回九州前方後円墳研究会九州前方後円墳研究会

小嶋篤二二〇一二「墓制と領域・胸肩君一族の足跡」『九州歴史資料館研究論集』三七九州歴史資料館

小嶋篤二二〇一四「大宰府保有兵器の蓄積過程」『古代武器研究』一〇古代武器研究会

小嶋篤二二〇一六a「大宰府の軍備に関する考古学的研究」平成二五〇二七年度科学研費助成事業若手研究（B）研究成果報告書九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター

小嶋篤二二〇一六b「鞠智城築造前後の軍備」『鞠智城と古代社会』第四号熊本県教育委員会

小嶋篤二二〇一六c「兵器の様相から見た古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会

小嶋篤二二〇一七「歴史をつなぐ海原」『特別展宗像・沖ノ島と大和朝廷』九

州国立博物館

小嶋篤二二〇一八「前方後円墳の終焉」から見た胸肩君』『沖ノ島研究』第四号「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産登録推進会議

小嶋篤二二〇一九「宗像・沖ノ島と胸肩君」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第一集九州国立博物館

小嶋篤二二〇二a「火国の領域設定と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第九号熊本県教育委員会

小嶋篤二二〇二b「考古資料からみた宗像君・沖ノ島祭祀の実像」『大宰府史跡指定一〇〇年と研究の歩み』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第二集九州国立博物館

小嶋篤二二〇二c「瀬戸内海西端における横穴式石室墳の様相」『古文化談叢』第八七集九州古文化研究会

小嶋篤二二〇二d「宗像の鉄刀・刀子・雛形鉄刀」『沖ノ島研究』第七号「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

小嶋篤二二〇二a「宗像型横穴式石室墳の研究」『九州歴史資料館研究論集』四七九集歴史資料館

小嶋篤二二〇二b「遠賀川流域の古墳と集落」『集落と古墳III』第二三回九州前方後円墳研究会

小嶋篤二二〇二c「津屋崎古墳群の造営と埴輪生産」『埴輪論叢』第一号埴輪検討会

小嶋篤二二〇二a「遠賀川流域と飛鳥時代」『集落と古墳の動態IV』第二四回九州前方後円墳研究会大分大会九州前方後円墳研究会

小嶋篤二二〇二b「九州の横穴式石室墳」『令和五年度九州考古学総会研究発表資料集』九州考古学会

小嶋篤二二〇二a「国造軍と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第一二号熊本県

教育委員会

小嶋篤二〇二四b「筑紫大宰の備え」『大宰府と古代山城・鞠智城』第一八回

鞠智城シンポジウム発表要旨二〇二四熊本県教育委員会

小嶋篤二〇二四c「筑紫の社」『東アジア都城と宗教空間』京都大学学術出版会

小嶋篤二〇二四d「筑紫君と『鞍轡尽しの坂』」『九州歴史資料館研究論集』

四九州歴史資料館

齋藤慎一・向井一雄二〇一六『日本城郭史』吉川弘文館

齋藤大輔二〇二四「刀劍ヤリ鉾」『中期古墳編年を再考する』六一書房

酒井芳司二〇〇九「倭王権の九州支配と筑紫大宰の派遣」『九州歴史資料館研究論集』三四九州歴史資料館

酒井芳司二〇一二「九州北部の豪族と筑紫大宰」『大宰府史跡指定一〇〇年と研究の歩み』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第二集九州

国立博物館

酒井芳司二〇一三「記紀・万葉集に見るいくさ」『新修宗像市史 いくさと人のびと』宗像市

酒井芳司二〇一四『大宰府の成立と古代豪族』同成社

笛生衛二〇一一「沖ノ島祭祀遺跡における遺物組成と祭祀構造」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告I「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

笛生衛二〇一八「沖ノ島祭祀の実像」『季刊考古学・別冊二七 世界のなかの沖ノ島』雄山閣

重藤輝行二〇一二「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告I「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

重藤輝行二〇一八「宗像氏と宗像の古墳群」『季刊考古学・別冊二七 世界の

なかの沖ノ島』雄山閣

重藤輝行二〇二〇「古墳時代九州北部の排水溝付堅穴住居と渡来人」『福岡大

学考古学論集3』武末純一先生退職記念事業会

篠川賢二〇二二『国造・大和政権と地方豪族』中央公社

篠川賢二〇一三『飛鳥と古代国家』日本古代の歴史二吉川弘文館

白木英敏二〇一八「御嶽山と下高宮の祭祀遺跡」『季刊考古学・別冊二七 世界のなかの沖ノ島』雄山閣

清喜裕二二〇一八「沖ノ島の滑石製品」『季刊考古学・別冊二七 世界のなかの沖ノ島』雄山閣

平尾和久・上田龍児・小嶋篤二〇二〇四「筑前ににおける集落と古墳の動態

一弥生時代終末期～飛鳥時代～」『集落と古墳の動態V』第二五回九州前方

後円墳研究会

松村一良一九九四「上津土塁跡」『久留米市史』第一二巻久留米市

松川博二二〇二四「六官衙と古代のくらし」『新修宗像市史』宗像市

向井一雄二〇一七「よみがえる古代山城」吉川弘文館

森弘子二〇一二「神々の成立と福岡県の神社」『福岡県の神社』海鳥社

矢野裕介二〇一八「鞠智城の変遷に関する一考察」『大宰府の研究』高志書院

矢野裕介二〇一九「有明海沿岸における古代山城の年代論」『大宰府学研究』

九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第一集九州国立博物館

吉田東明・進村真之・宮地聰一郎・小嶋篤二〇二二「大野城跡・四王院跡出土土器の総量分析」『大宰府四王院』九州国立博物館

吉田東明二〇二四「大宰府外郭線」『季刊考古学・別冊四六 九州考古学の最

一前線2』雄山閣